



個に応じた学び～ 怒る・叱る・諭す ～

先月、二人の先生による特別授業を実施しました。一人目の授業は、小林先生（『学び合い』神奈川の会代表）の「学び合い」です。「学び合い」とは、誰一人取り残さないという考えのもと、仲間と学び合い、教え合いながら学習を進めていく授業です。ある調査によると、授業をする前に「授業後にテストをします。」と言ったクラスと「授業内容を友達に、分かるように説明してもらいます。」と言ったクラスの両方に同じテストを実施したところ、圧倒的に後者の方が成績がよかったということです。人に教えるという行為は、自分の理解を整理する力が存在することが証明されています。

二人目の授業は、津村柁広先生（著書「思春期コーチング（明治図書）」）の「コーチング」です。コーチングとは、子どもたちが本来持っている、意欲や能力を引き出し、それぞれが描いている夢を実現させることを支援する手法です。津村先生は、「123コーチング」といわれる手法で、子どもたちに関わっていただきました。ZOOMではありましたが、コーチングを受けている子どもたちの姿は、ワクワク感に満ちていました。

この二つの授業での子どもたちの姿を見て、それぞれの子どもたちは、世界にたった一人のかけがえのない存在であり、個々に素晴らしい力を秘めていると強く感じました。どうすれば、それぞれの可能性を十分に引き出すことができるのかを考えていくことが、我々大人たちのすべきことであると思えました。来年度からの小中一貫教育においても、「学び合い」や「コーチング」の考え方をもとに、「個に応じた学び」を更に追究していきたいと考えています。

閑話休題。私たち大人が子どもに施す行為として、「怒る」と「叱る」があります。広辞苑によると、【怒る：激して気が荒立つこと。】【叱る：声を荒立てて欠点をとがめること。】とあります。少し前までは、「子どもには、怒らず、叱りましょう。」とよく言われていました。「一方的に自分の感情に任せて言葉を吐き出すのではなく、子どものことを思って、あえて声を荒立てても間違いを正してあげましょう」ということでしょうか。しかし、最近の脳科学の研究では、激しい言葉は、ほとんどの場合、子どもの脳をショートさせてしまい、肝心のメッセージが子どもの脳には届かないことがわかっています。まれに、怒（叱）られて言うことをきける子もいますが、メッセージを曲解している可能性があり、脳と心にストレスが溜まり、思春期になって好ましくない形で表面化する可能性があることも報告されています。

では、どうすれば大人のメッセージが子どもの脳にしっかり届くのでしょうか。今の主流は、「諭す」だと言われています。「諭す」とは、感情的にならず論理的に言い聞かせることです。そんなことが出来れば、苦労はしないと意欲も分かりますが、やはりメッセージを子どもたちの脳に届け、よりよく発達させるには「諭す」ことが重要です。平たく言うと「言って聞かせる」ことです。発達段階によっては、「教えてあげる」と考えてもいいと思います。そして、この時に大事にしたいことは、目と目をしっかり合わせて、落ち着いて話してあげることです。この「諭す」という行為は、上に記したコーチングの考え方そのものです。

私たち大人は、子どもと向き合うときに、「子どもたちは、必ずできる。」といつも心にとめて、子どもの目を見ながら、子どもの脳にしっかりと伝えていくことを実践したいものです。



【123コーチングの授業風景】